

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370326

研究課題名(和文) HM136写本の成立から印刷までの過程

研究課題名(英文) The Creation of MS HM136 to its Use as an Exemplar

研究代表者

高木 眞佐子 (Takagi, Masako)

杏林大学・外国語学部・教授

研究者番号：60348620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：今回の調査では、複数の写本および印刷本における言語的特徴の比較、印刷原稿見積もり用マークの比較を行った。に関しては、原本にはなかったいわゆる「キャクストン英語」が印刷の過程で洗練され、ある程度一貫性を持った形で印刷本に移行している事実が裏付けられた。また、編集者による付け加えや削除も極めて規則的に行われている部分があることが明らかになった。

はHM136写本とVat. lat. 11441写本における印刷見積もり用マークを比較するという、これまで行われたことのなかった比較である。casting-off markのデジタル画像を用いて、両者のパターンの相違と相似を比較検討した。

研究成果の概要(英文)： This set of research comprises two aspects: 1 language development from the Prose_Brut_ manuscripts to the printed edition, 2 compare and contrast of two casting-off marks by Caxton.

The first investigation basically confirmed what has already been known in Caxton's language. It confirmed specific grammar patterns appear only in the printed edition. It also revealed a previously unknown pattern of copy-fitting.

The second investigation compared the casting-off marks of _Nova Rhetorica_'s exemplar at Vatican and those of the Prose_Brut_ in Huntington, using digitized images. This is the first known attempt as far as Caxton's printing is concerned. The investigator sought the patterns of marks in both manuscripts and suggested several theories as to how to interpret their similarities and differences.

研究分野：中世英文学

キーワード：書誌学 印刷本 ウィリアム・キャクストン 写本 印刷見積もり

1. 研究開始当初の背景

(1) 2011年にキャクストンによる2つめの英語の印刷用手稿がDaniel Wakelinによって発見されてからも、キャクストン工房でどのような手続きで印刷が行われたかについては2014年時点ではまださほど研究の進展がみられずにいた。またカリフォルニアのハンティントン図書館にある印刷用手稿 HM136 写本の来歴にある中でもっとも古いとみなされている John Leche という名前にも有力な手がかりは得られなかった。研究代表者がこれまで知られている大英図書館とオックスフォード図書館に所蔵される写本への John Leche という書き込みを4点比較した限りでも、同一人物による署名の同定は極めて困難な情勢であった。つまり HM136 写本の成立から印刷までの過程についてはほとんど知られていなかったのが、2014年時点での研究状況であったといえる。

(2) ゆえに研究の着想段階では、この分野における研究の可能性は HM136 写本の来歴の調査も含めて極めて多岐に渡った。上記の John Leche の筆跡鑑定に成果が早い段階で期待できなくなったことが影響した結果、成立よりもむしろ発展の問題に研究の大半を傾注するという方向転換が行われることとなった。すなわち「英語の父」といわれるキャクストン工房の英語がどの程度まで印刷用原稿の英語を変えたのかという問題、また印刷見積もり用のマークが印刷工たちによってどのように使用されたのかという問題である。

2. 研究の目的

HM136 写本はキャクストン工房で唯一知られている英語の印刷用原稿であるが、ラテン語も併せてみると2冊目の印刷用原稿である。研究代表者はこの二つの点から考えて、以下の二点に目的を絞ることにした。2017年には研究代表者が進めてきた方向性を支持する見解を、この分野の泰斗である Lotte Hellings 博士が認める論文を発表したこともあり、以下に記述するような成果の提示となった。

(1) 英語の発展史と HM136 写本

キャクストンの英語はその前書きや後書きで極めて有名であるが、一方印刷物を見ると、意外にもオリジナルの原稿(と思われるもの)の英語の様式を踏襲しているものが多く、キャクストン自身の英語とはかなり違ったものも混ざっていると類推されてきた。ちなみに HM136 写本はその写本自体の性格からいってもキャクストンが使っていた英語ともかなり近いものであった。これまでは英語の印刷用手稿の実物を検討してキャクストンの英語を論じる研究はなかったため、実際の印刷用手稿を使って英語の変化をたどることには意味があるだけでなく、印刷用原稿をかなり自由に改変した植字工

の努力がどの程度立証できるかをやってみることに意味があると考えた。

キャクストン工房でスペリングのヴァリエーションが恐らく植字工によって異なっていたことは既に複数の日本人研究者によって指摘がされていたが、研究代表者はスペリングのみならず、単語の置き換えや語順の並べ替え、また前置詞や関係代名詞の使用などにも注意を払うことによって、「キャクストン英語」の正体を同定すること、またこれらを恣意的な植字工による改変と差別化する可能性を拓くことを研究の第一の目的とした。

(2) 二つの印刷用原稿の比較

HM136 写本から起こされた印刷本は1480年に *The Chronicle of England* として出版された。一方、もうひとつの印刷用原稿、Vat. lat. 11441 は1478年頃に出版されている。しかし両者を手元において比べてみることはこれまでではできなかった。デジタル画像による比較研究が盛んになった今日だからこそ可能になってきた研究形態といえる。

片方はラテン語、片方は英語という相違はあるものの、わずか2年の間に同じ工房で生産された本の印刷用原稿の間にはどのような差異があり、また共通点があるのか。そのことを探ることを第二の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 2. 研究の目的に挙げた第一の項目は、既に研究者が入手したマイクロフィルムやそれを紙媒体に起こした様々なノートを駆使して比較校合を行うことにより実行した。

比較に際しては Brie による校訂版、キャクストンの *The Chronicles of England* 第一版のファクシミリ、そして大英図書館の BL Add. 10099 写本のマイクロフィルムを使用した。特に最後の写本は、HM136 写本が印刷用手稿だという同定によって、それまでのキャクストン版にもっとも近い写本だという仮説を研究代表者が覆した写本である。

これらの書物との複数の校合によって、HM136 写本と印刷本との細かい差異が両者の間に特有のものであることを確認した。同時に英語の発展という側面に着眼して際立った表現やスペリングの差異を収集した。

(2) 2. 研究の目的に挙げた第二の項目は、ヴァチカン図書館で Vat. lat. 11441 写本のデジタル画像を入手することから始まった。

比較において使用したのは HM136 写本のマイクロフィルムである。ただ、マイクロフィルムでは印刷見積もり原稿の印が見づらい部分もあるため、Daniel Wakelin 博士に研究上提供していただいた調査結果を参照して内容を確認した。

4. 研究成果

研究の目的の部分で挙げた2つの目的に沿

って、それぞれの研究成果の主な点を説明していく。

(1) 英語の発展史と HM136 写本

キャクストンが英語を近代化した過程を文法、語彙、語順、スペリングに大別して分析した。また、植字工が印刷原稿から文字を水増しした部分、削除した部分を抽出して比較した。比較結果は細かい工夫と、大胆な改変部分とに大別して示した。これまでキャクストンの copy-fitting について印刷用手稿を元に具体的な事実関係を明らかにした研究は無かったことから、今後の西洋初期活版印刷の発展を論じる上で資料として貴重になると予測される。

(1)- 文法

関係構文の中の能動態が受動態になる、特に that men called が that was/were called になるパターンが非常に多いことが裏付けられた。他のキャクストン英語でも既に指摘されていたことである。

また、原本にある間違いを直すという側面もキャクストン工房ではみられる。複数形名詞に another が付いていた写本の事例を印刷本で other にするといった文法書のような例も本書にはみられた。

(1)- 語彙

顕著な近代化として挙げられるのは、副詞の接尾辞-lich が ly に変えられていることである。Nomme は take に、clepede は called になるなど、語彙の選択も近代化の一路をたどっている。この過程で er や suyng、bene など古めかしい語彙は姿を消していった。キャクストンによる典型的な英語の近代化の例である。

(1)- 語順

当時はまだ多かった、SOV の語順を SVO に直す例が多く見られた (hym fynde が fynde hym)。また、be 動詞の前に過去分詞を置く形も現代英語の be + 過去分詞に直っていた (called was が was called)。

(1)- スペリング

既に述べたように、植字工の自由裁量でスペリングの幅はある程度決められた。ゆえに印刷本上で残っているスペリングはページごとに特徴がみられ、例えば power と綴るか poer と綴るか、が一貫性を持っているわけではない。しかしここでも全体として近代化の傾向はやはり色濃い。例えば saugh の綴りは saw に、slough の綴りは slowe に、といった変化の方向性ははっきりしている。

(1)- 少しだけ文字を増やす

もっとも単純なやり方は短縮形をひらく、アラビア数字を英語で綴るといったものだが、代名詞を固有名詞にしたり、Jesus Christ とい

う慣用表現を挟んだりする例が一般的である。地名や人名を繰り返すという手法も、ページ内の文字数を増やす工夫として行われた。

(1)- 少しだけ文字を減らす

基本的に HM136 写本から印刷本に移行するときには、恐らく紙の節約をするためにぎゅうぎゅう詰めに印刷するような方向でページの見積もりが行われた。そのため、文字を減らす工夫のほうがより多くページ上に残されている。(1)-7 で扱った工夫を逆にする例のほか、慣用表現である that is for to say や foresaid を節約する、形容詞を節約する、the や of を節約して語順を入れ替える(the reign of King Richard を King Richards reign に)などの短縮を目指す工夫がみられた。

ここまでの結論として、細かい改変においてはそのページで短縮を目指すか、水増しを目指すかが一貫性を持って決められていたわけではなく、大まかな指針に沿って矛盾する二方向の植字パターンが混在していたことになる。

(1)- 大幅に言葉を増やす

HM136 写本から大幅に言葉を増やした例はあまり多くない。唯一、編集上の工夫として見つかった付け加えは、138 章と 139 章の間である。138 章終わりで記述されるスティーヴン王は、1139 年についてであるが、139 章の始めに出てくるスティーヴン王の記述は 1141 年のものである。原本では幾つかの戦闘場面をまとめてしまったためそうした記述になったと思われるが、恐らく編集責任者であるキャクストン自身が、138 章終わりに新たに 2 行を付け加えることにより、この時期の記述に正確を期したと考えられる。

(1)- 大幅に言葉を減らす

キャクストンの時代には校正用紙といったものは無かったため、植字工が大きなミスをしてしまった場合でも気付かれない場合があった。今回の研究ではしかし、大幅に言葉が HM136 写本から減っている部分は印刷本のある特定の箇所集中していることが発見された。これは casting-off mark に忠実に仕事をしてきた植字工が、いつもある特定の箇所です「つじつま合わせ」がうまくいかないことに気が付いた可能性を示唆している。以下の表と図は丁合の中で一行以上の削除が行われた、その具体的な箇所を示している。

Folio number of each Signature (Quire) in Caxton's edition	Long omission instances
f. 1	1
f. 2	1
f. 3	0
f. 4	1
f. 5	3

f. 6	0
f. 7	4
f. 8	5



印刷本では一つの丁合が8枚のリーフから成り立っている構成であったが、後半のリーフにおける削除の確率が前半に比べ圧倒的に高い。これは前半に比べ植字工が後半に入るとページ合わせに困難を感じたという証左だと考えられる。丁合と丁合の境となる casting-off mark はほかのマークに比べて重要度が高いということが、この調査結果によりはっきり証明されたといえる。

(2) 二つの印刷用原稿の比較

Vat. lat. 11441 写本と HM136 写本の印刷原稿見積もりマークを詳しく比較することにより、キャクストン工房における印刷過程について具体的な事実を明らかにした。1480年の *The Chronicles of England* は、キャクストン工房での新機軸が体現された作品として知られていることから、Vat. lat. 11441 写本から HM136 写本への変化は、工房での工程変化を示唆している可能性がある。今回の印刷用原稿の比較により、その一端をみる事ができた。

(2)- Vat. lat. 11441 写本の印刷見積もり用マークはページの右マージンにチェック印で示され、ページの左マージンにスラッシュ印で示される HM136 写本の印刷見積もり用マークとは特徴が非常に異なる。それだけでも異なる人物による仕事だと考えてもおかしくないほどだ。また Vat. lat. 11441 にはキャクストン版に対応するページ番号が付されており、1から20までのアラビア数字が写本上に繰り返し現れるが、この特徴は HM136 写本にはまったくみられない。

さらに、Vat. lat. 11441 写本上では行の途中にはいかなるマークもまったくみられないのに対して、HM136 写本では行の途中のどの部分でページが終わるのが具体的にマークされている場合がある。この特徴は、Vat 写本がラテン語であり HM136 写本が英語であるということにも起因する特徴だ。

以上のように両写本の印刷見積もり用マークには顕著な違いがある。

(2)- 両写本の印刷見積もり用マークは一方で、間違いを含むという点で共通する点がある。どちらにも、数行上や数行下に、ほとんどそっくりなマークが付けられている場合があるが、それらが印刷本に反映されてい

ない、という例が見られる。

このことは、マークの付け方の詳細は違って、マークの働きやマークを巡る植字工の反応は似通っていたということを示唆している。こうした「使われなかった」マークがどんな理由でそこに残されているのかについては更なる検討が必要であるが、ここでは、1478年の Vat. lat. 11441 写本のページ見積もり方法と 1480年の HM136 写本のページ見積もり方法は、英語でもラテン語でも基本的には同じやり方だった可能性があるという仮説が提示できる。

(2)- 両者本の印刷見積もり用マークはまた、始めの2丁のマークの付け方が後半のマークの付け方と異なるという点で共通している。特に HM136 写本では明らかに丁合ごとに異なるマークの付け方をしているという特徴があった。Vat. lat. 11441 写本では、最初のマークの記号の付け方が始めの2丁合では極めて薄かった。

始めの2丁ではいわば印刷見積もりも慎重に行い、徐々に3丁以降で軌道に乗せていくという意味合いがあったこと、そしてその方法は形式が異なっても、1478年も1480年も、恐らく始めの2丁とそれ以降では担当者の交代という同じ方法が踏襲されたということが示された。

(2)- 著者による原稿である Vat. lat. 11441 に比べ、HM136 写本は、写本と印刷本との類似性が高い。写本にシグネチャ番号があることも印刷本に似ている。このことは、キャクストン工房で写本と寸ぶん違わない印刷本を作成するために少なからず貢献しただろう。

さらに HM136 写本の印刷見積もり用マークの間隔を数えてみたところ、マーク箇所は、写本よりも少ない紙数に収まるようにつじつまが合わせられている部分がみられた。こうした特徴は Vat. lat. 11441 にはなかった。これは後者が著者による原稿でありそのレイアウトの踏襲は重視されていなかったことと関係があるだろう。HM136 写本はその出来が極めて均一だったことから、写本を基準としつつ、そこからどの程度紙を削減するのかという計算がしやすかったのだと考えられる。

参考文献： Lotte Hellinga, “Bibliographical Notes: Caxton’s *Chronicles of England* and its Printer’s Copy,” *The Library*, September 2017: 316-24.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Masako Takagi, “The Printer’s Copy at

Caxton's Print Shop: Some Observations on HM Huntington MS 136," *Kyorin University Review* 30 (2018): 67-85. 査読有

Masako Takagi, "Research Note: Characteristics of Casting-off Marks Used by Caxton: Comparison of Huntington HM136 and Vatican Vat. lat. 11441," *Kyorin University Review* 29 (2017): 45-55. 査読有

Masako Takagi, "Retrograde Text: Manifestation of Authenticity?" *Studies in Medieval English Language and Literature* 30 (2015): 59-69. 査読有

Masako Takagi, "A Bibliographical Note on Folio 115r of BL MS Additional 10099, a Copy of the *Chronicles of England*," *Kyorin University Review* 26 (2014): 1-6. 査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

(研究発表)高木眞佐子「ウィリアム・キャクストンの印刷用手稿に見るテキスト改変」日本中世英語英文学会 第33回全国大会 2017年12月3日 立教大学(池袋キャンパス)

(研究発表) Masako Takagi, "Caxton's Editorship Revealed: Textual Comparison of the *Chronicles of England* 1480 and HM136, its Exemplar," The Fourteenth Biennial Conference of the Early Book Society, St. Anne's College, Oxford, UK. 5 July, 2015.

(シンポジウム) "Does Spelling Matter in Pre-Standardised English?" Chaired by Ryuichi Hotta. (1) Simon Horobin, "Purging the Grosser Provincialisms? : Spelling and Dialect in Late Middle English." (2) Seiji Shinkawa, "The Zero Period of Spelling Standardization: Two Contrasting Manuscripts of Lazamon's *Brut*." (3)

Ryuichi Hotta, "Etymological Respellings on the Eve of Spelling Standardisation." (4) Masako Takagi, "A Retrograde Text as Manifestation of Authenticity?" The 30th Annual Congress of the Japan Society for Medieval English Studies. Doshisha University, Kyoto, Japan. 6 Dec, 2014.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高木眞佐子 (TAKAGI, Masako)

杏林大学・外国語学部・教授

研究者番号 : 60348620